

令和5年2月16日

株式会社 JERA 代表取締役社長 小野田 聡 様

日本野鳥の会秋田県支部
支部長 佐々木 均 (公印省略)
秋田県横手市前郷一番町 1-21

公益財団法人 日本野鳥の会
理事長 遠藤 孝一 (公印省略)
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

日本雁を保護する会
会長 呉地 正行 (公印省略)
宮城県栗原市若柳川南南町 16

「(仮称)男鹿市、潟上市及び秋田市沖洋上風力発電事業計画段階環境配慮書」
に対する意見書

現在、貴社が公告・縦覧および住民意見を募集している「(仮称)男鹿市、潟上市及び秋田市沖洋上風力発電事業 計画段階環境配慮書」に対して、鳥類の保護の観点から下記の通り意見を述べる。

記

対象事業実施区域(以下、計画地という)に設定されている海域(以下、当該海域という)は、海鳥の重要生息地(マリーン IBAs)の指定海域および渡り鳥の重要な経路と重なっていること、また、ガン・ハクチョウ類、シギ・チドリ類、カモメ類、スズメ目の小鳥類等にとって国内でも重要な移動経路となっていること、計画地の周辺は繁殖する希少猛禽類であるミサゴやハヤブサの採餌海域となっていることなどから、鳥類の保護の観点から考えて、当該海域は事業実施想定区域から除外されるべきである。そのため、本事業は環境影響評価方法書の作成に進まずに、現段階をもって事業を中止すべきである。また、本海域は2022年9月に再エネ海域利用法に基づく促進区域に指定されたが、その決定のプロセスの中で、環境保護団体をはじめ動物生態学や海洋生態学等の専門家意見を聴取することなく指定された。鳥類保護の立場から、生態系に多大な影響があると考えられるこの海域での大規模洋上風力発電施設を建設することを容認することはできない。

以下に、当該海域における鳥類の生息状況と事業の中止を求める理由、および配慮書の予測評価と環境保全措置に対する意見を述べるが、ここでの意見は前述の立場に立ったうえで配慮書の記載内容について述べるものであり、方法書の段階に進むことを容認するものではない。

1. 当該海域における鳥類の生息状況等と事業の中止を求める理由

計画地の北側にある男鹿半島は、一年を通して旅鳥や漂鳥、希少種を含めた様々な種類の鳥類が往来する。また、計画地の北側には国際的に重要な水鳥の渡りの中継地として東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(EAAFP)参加地となっている八郎潟干拓地が位置している。

貴社の事業の計画地はこれらの鳥類が移動する際の出入り口となる場所にあたり、洋上

風力発電施設（以下、洋上風車という）の配列も鳥類の進行方向に対し垂直方向に配列されるものであり、鳥類の移動を遮る形になっていることから、これら鳥類の個体群の存続に影響を与える可能性が高い。この海域は鳥類の保護のために、洋上風車などの人工構造物の設置などをせずに自然のまま残すべき重要な場所であり、風車を建てるべきではない。

以下日本野鳥の会秋田県支部（以下、秋田県支部）が把握している鳥種ごとの生息状況を述べる。

ガン・ハクチョウ類について

八郎潟に飛来する亜種オオヒシクイ（天然記念物、準絶滅危惧）、亜種ヒシクイ（天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類）、マガン（天然記念物、準絶滅危惧）、ハクガン（絶滅危惧ⅠA類）、シジュウカラガン（国内希少野生動植物種、絶滅危惧ⅠA類）等のガン類は渡りのピーク時の当該海域周辺の利用個体数は1日で最大20万羽に達し、日本に飛来するガン類のおよそ8割が移動の際にここを経由しているとされている。八郎潟に渡来するガン・ハクチョウ類のうち日本海ルートをとる群れは洋上を利用することが多く、沿岸域の洋上を渡る姿を支部会員を含む地域住民が頻繁に目撃している。計画地での洋上風車の建設はこの日本海側ルートの渡り経路を大きく阻害する。

マガンの長距離間移動の際には、高さ100mの飛翔高度に至るまでに3kmの水平距離が必要とされている^{注1)}が、本事業計画の風車はそれよりはるかに高く最大でおよそ288mあり、一方で八郎潟からの距離はおよそ5~6kmと十分でないことから、風車を飛び越えられぬ高さには達する前に風車に到達してしまう可能性が高い。

また、ガン・ハクチョウ類は、晴天時の日中だけでなく夜間および悪天候や視界不良時にも移動することが多いため、このようなときにはガン・ハクチョウ類の飛翔方向と垂直に並ぶ風車群を回避することは難しく、衝突の危険性が格段に高くなる。さらに、これらの鳥類は渡来期・渡去期だけではなく、越冬期にも気温や積雪状況によって他の中継地や越冬地との往復を何度も繰り返すことがあるため、それだけバードストライクが発生する機会が増えることが懸念される。

内陸部だけでなく沿岸部に滞在するガン類もいる。また、計画地に隣接する男鹿半島沿岸部で天然記念物及び絶滅危惧Ⅱ類のククガンが冬季に渡来することが確認されている。ククガンは主に海域を生息場所としており、洋上風車による衝突や生息地放棄等の被害が生じることが危惧される。

カモ類について

日本野鳥の会秋田県支部が毎年1月に行っているガン・カモ類対象の調査及び不定期の観察により、計画地周辺ではツクシガモ（絶滅危惧Ⅱ類）、アカツクシガモ（情報不足）、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、シマアジ、トモエガモ（絶滅危惧Ⅱ類）、コガモ、オオホシハジロ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、ビロードキンクロ、クロガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミアイサなどのカモ類を確認している。

淡水ガモを含む多くのカモ類は計画地となっている海域の水面に群で着水することが多く、渡りの際は計画地上空を飛ぶことを当支部会員が確認している。カモ類は渡る個体数の多さ、また、休息のために飛行の途中で着水するなど、飛翔高度を0m~200mで頻繁に変えるという飛び方の特徴から、洋上風車の建設の影響を大きく受けることが予想されるため、カモ科鳥類の保護の観点から当該海域に洋上風車を建設するべきではない。

シギ・チドリ類について

干拓事業をしていた頃の八郎潟はシギ・チドリ類の一大飛来地であった。現在では当時と比べるとその数は減っているが、今なお多くのシギ・チドリ類が計画地周辺に飛来す

る。

男鹿市船越海岸や潟上市天王海岸は多くのシギ・チドリ類を観察できることから県内では重要な場所であり、秋田県支部が定期的に観察会を開いている場所である。海岸一帯、及び八郎潟に至る水路（船越水道）で、ダイゼン、コチドリ、シロチドリ（絶滅危惧Ⅱ類）、メダイチドリ、ミヤコドリ、オオソリハシシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、チュウシャクシギ、ダイシャクシギ、ハウロクシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、アオアシシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、キョウジョシギ、オバシギ、ミユビシギ、トウネン、ヨーロッパトウネン、ハマシギ（準絶滅危惧）、アカエリヒレアシシギなど希少種を含む多くの鳥類が確認されており、オオソリハシシギやアカエリヒレアシシギについては時に 1,000 羽を超える群を見ることもある。

また、やや内陸側の水田地帯ではケリ、ムナグロ、ハジロコチドリ、コチドリ、セイタカシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、オオジシギ（準絶滅危惧）、タシギ、シベリアオオハシシギ（情報不足）、カラフトアオアシシギ（国内希少野生動物種、絶滅危惧ⅠA類）、オグロシギ、チュウシャクシギ、ツルシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、アカアシシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、コアオアシシギ、アオアシシギ、クサシギ、タカブシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、トウネン、ヨーロッパトウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、ウズラシギ、サルハマシギ、キリアイ、エリマキシギなどが確認されている。

さらに、男鹿市船川港ではコシャクシギ（絶滅危惧ⅠB類）の記録があり、潟上市天王や秋田市雄物川河口では世界的希少種であるヘラシギ（国内希少野生動物種、絶滅危惧ⅠA類）が複数回記録されている。

これらシギ・チドリ類も渡りの際に洋上を飛ぶことを確認しており、貴社事業の立地はこれらの鳥の移動を阻害する可能性がある。干潟の少ない日本海側には代替地がないため、日本海側のシギ・チドリ類の渡りの重要な中継地に風車を建てるべきではない。

カモメ類について

男鹿半島はカモメ類が多く、計画地周辺では男鹿市船川港～船川港比詰にかけての区域が県内有数のカモメ類の越冬地である。また、椿漁港をはじめその他の漁港にも冬季にはカモメ類が集まり、時に大群を形成する。種としてはウミネコ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ（準絶滅危惧）の他、ズグロカモメ（絶滅危惧Ⅱ類）などの希少種も時折、船越水道河口で記録されている。また、ミツユビカモメが数千羽の単位で利用することもある。これらカモメ類は越冬期における採餌地間の移動および春秋の渡りの際に計画地の海域を利用している。

当該海域に飛来するカモメ類で大部分を占めるオオセグロカモメおよびウミネコは近年、個体数の大幅な減少が報告されている^{注2)}。カモメ類は世界的にもバードストライクが発生しやすい種群であることが知られており^{注3)}、当該海域に風車が建設されれば採餌環境が阻害され、バードストライクが頻発する可能性がある。カモメ類は個体数が多いため生態系の機能や安定性に与える影響が大きいとされているため、人為的影響は最小限に抑える必要があるため、当該海域に洋上風車を建設すべきではない。

ミサゴについて

当該海域の沿岸部は環境省により準絶滅危惧種に指定されているミサゴの繁殖地となっており、当該海域は重要な採餌場所となっている。日本でもすでに多数のミサゴがバードストライクに遭っており^{注4)}、計画地周辺の由利本荘市内沿岸でも 1 件、風車による衝突例がある（2018 年）。

計画地付近は繁殖地であるだけでなく、渡りの通過点でもある。ミサゴは冬に越冬地に移動し、春に繁殖地に戻るが、北海道の積丹半島で標識された 2013 年生まれの個体が 2018 年 4 月に本計画地沿岸の船越海岸において支部会員により確認された。この個体は 2019 年に北海道積丹半島で繁殖していることが確認されたため、船越海岸は渡りの途中で

利用したことが判明している。本事業計画はこのミサゴの移動経路を阻害する恐れがある。

さらに、近年ミサゴの生息地である計画地沿岸の潟上市に建った大規模な陸上風車による累積的な影響も懸念される。これ以上ミサゴの生息環境を悪化させないためにもミサゴの利用海域での洋上風車を建設すべきではない。

ハヤブサについて

当該海域の沿岸部は国内希少野生動植物種及び絶滅危惧Ⅱ類に指定されているハヤブサの繁殖地になっており、当該海域は重要な採餌場所となっている。特にハヤブサは洋上を渡る小鳥類を頻繁に狙うことが知られているが、捕食に集中することで風車の存在に気付くことができず、バードストライクに遭う可能性があると考えられるため、ハヤブサの採餌場所になり得る海域には洋上風車を建設すべきではない。

アオバトについて

計画地に隣接する沿岸域には秋田県で準絶滅危惧種に指定されているアオバトが春から秋にかけて砂浜に海水を飲みに来る。上記のハヤブサもこれを狙って出現する。

その他の重要種・希少種について

計画地南西の沖合に位置する飛鳥は、春季及び秋季の渡りの時期に、多くの種類の鳥類が観察される場所として名高いが、春季の飛鳥で毎年確認されるヤツガシラが計画地の沿岸周辺で確認されており、飛鳥経由で洋上を飛翔している可能性が高い。

そのほかにも計画地周辺の沿岸・内陸にはハイイロウミツバメ、コグンカンドリ、ヒメウ（絶滅危惧ⅠB類）、アカガシラサギ、クロサギ、カラシラサギ（準絶滅危惧）、クロツラヘラサギ（国内希少野生動植物種、絶滅危惧ⅠB類）、タンチョウ（特別天然記念物、国内希少野生動植物種、絶滅危惧Ⅱ類）、ナベヅル（絶滅危惧Ⅱ類）、オジロワシ（天然記念物、国内希少野生動植物種、絶滅危惧Ⅱ類）、ケアシノスリ、ヒメコウテンシ、コヒバリ、コノドジロムシクイ、ギンムクドリ、ホシムクドリ、イナバヒタキ、ハシグロヒタキ、マミジロキビタキ、ヤマヒバリ、カヤクグリ、セジロタヒバリ、ムネアカタヒバリ、ハギマシコ、ユキホオジロ、シマアオジ（国内希少野生動植物種、絶滅危惧ⅠA類）等の希少種や稀な鳥類をこれまでに秋田県支部の調査で確認している。さらに近年はアカアシチョウゲンボウが春に定期的に飛来していることがわかった。

当該海域はこれら重要種・希少種の飛行ルートになっている貴重な海域であり、これらの鳥類が利用する可能性がある海域に洋上風車を建設すべきではない。

ヒヨドリ等海上を渡る小鳥類について

森林性の小鳥類も渡りの移動をする際に洋上を利用することは多く、現に飛鳥航路の離岸距離 10 km の洋上で北に向かうヒヨドリの大群が本支部会員によって確認されている。小鳥類は夜間に渡ることが多く群れで移動するため、バードストライクの発生は重大な影響を与える可能性がある。本事業風車はこれら小鳥類の渡りの障壁になる可能性が高いため、洋上風車を建設すべきではない。



1997年5月 秋田県沖 飛鳥航路フェリーにて撮影

海鳥について

計画地は、洋上風車の建設による生息地放棄が頻繁に確認されているアビ^{注5)}、オオミズナギドリをはじめ、トウゾクカモメ、ハシブトウミガラス、ウミガラス（国内希少野生動物種、絶滅危惧ⅠA類）、ウミスズメ（絶滅危惧ⅠA類）、ウトウなど多くの海鳥の生息地・採餌地と重なっている。また、アジサシ類が渡りの時期に通過することも目撃されている。

海外の洋上風力発電では育雛期に多くのバードストライクが生じるコアジサシ^{注6)}（絶滅危惧Ⅱ類）が雄物川河口付近において繁殖している。コアジサシの繁殖状況と行動範囲を把握し、影響の有無を評価すべきである。

潮流の変化による影響について

配慮書 4.3-35 (p.289) によると、計画地に隣接した場所に藻場が存在しているが、貴社は「風力発電設置区域には藻場は存在しないこと、また藻場と風力発電設置区域は離れていることから、地形改変及び施設の存在による藻場の生育環境に重大な影響を及ぼす可能性はないと予測した」としている。しかし、欧州の先行地域では洋上風車が建った後に海底の砂の流れが変わり、以前には存在しなかった砂州ができたという^{注7)}。砂の流れが変わることにより、底生植物や動物に影響が出た場合、それを餌とする鳥類にも影響が出ることになる。このような先行事例を踏まえ、潮流の変化が生態系に与える影響を評価すべきである。

2. 予測評価と環境保全措置について

重要な種への影響予測結果について

重要な種への影響予測結果（配慮書 4.3-17～4.3-19、p.271～273）に「海岸・海域以外を主な生息環境とする重要な種については、生息環境の変化はないことから、地形改変及び施設の存在並びに施設の稼働に伴い影響を受ける可能性はないと予測した」とあるが、陸上の農耕地・河川・湖沼・湿地等にいるガン・カモ・ハクチョウ類及びシギ・チドリ類は海岸および海域も頻繁に利用していることから、これらの鳥類にとって陸上と洋上は連続性がある生息環境と考えるべきである。このため、洋上風力発電施設の建設や稼働は内陸部の鳥類にも影響を与える可能性があることを認識すべきである。以上のことから、洋上の計画地を飛翔する個体数と陸上の個体数が関連する可能性も考え、計画地に近い陸上の個体数もある程度調査するべきである。

具体的な保全措置を明記すること

配慮書 4.3-21(p.275)において、「必要に応じて事業者が実行可能な範囲で環境保全策を行うこととする」とあるが、どのような影響が予測されたときに、どのような保全措置を取るのかを具体的に示すべきである。また、楽観的な予測を立てて強引に風車を建設した結果、鳥類をはじめとする生態系に大きな影響が出た場合、どのような事後対策をとるのか、順応的な管理を行なうのかについてもあらかじめ計画し、明記されたい。秋田県内でも屈指の重要区域である当該計画地で事業を計画するのであれば、この区域の環境を損なわないことに責任を持っていただきたい。

打設音・稼働音による影響を評価すること

秋田港・能代港において先行する洋上風力発電事業の打設工事が始まっているが、打設音が魚を遠ざけていることが一般市民による測定で確認されている。貴社が設置予定の風車はこの風車よりもサイズが大きいため、秋田港や能代港の事業よりも大きな影響が出るのが予測される。魚群の動きの変化は魚食性鳥類の分布にも影響を与える可能性が高いため、実際にどのくらいの音が出るかシミュレーションを行い、それが魚群の動きや分布に与える影響を予測し評価すべきである。また、建設後のブレードの回転や機械音の発生に伴う騒音について、洋上風車では海中の広域範囲に影響を及ぼし、魚群に不測の影響を与える可能性があるため、この点も含めた予測、評価、回避対策が求められる。

3. 協議会の設置について

上記で述べた調査の結果から得られたデータを地元団体や鳥類保護関係者および鳥類や風力発電の専門家等と共有し、風車の設置位置を決定するための公開の協議会を設けることを求める。

4. 住民意見は概要ではなく原文を記載すること

配慮書に対して提出された住民意見は、概要としてまとめられたうえで方法書に記載されるが、今回の意見書に記載されている意見等は概要としてまとめることなく、原文のまま掲載することを希望する。また、また、添付の写真も掲載することを求める。

以上

- 1) 植田睦之・嶋田哲郎 (2009年) 長距離移動するマガンの飛び立ち地点からの距離と飛行高度との関係 Bird Research Vol.5: S17-S22
- 2) 先崎理之・照井 慧・富田直樹・佐藤文男・福田佳弘・片岡義廣・綿貫 豊 (2019年) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan (日本における普通海鳥種の長期的減少) Bird Conservation International (鳥類保全学の専門誌) DOI 10.1017/S0959270919000352
- 3) 浦 達也 (2015年) 風力発電が鳥類に与える影響の国内事例 Strix Journal of Field Ornithology ©Wild Bird Society of Japan Vol. 31, pp. 3-30
- 4) (公財)日本野鳥の会 (2020年) 日本国内における風車によるバードストライクの事例数 日本野鳥の会 HP example_birdstrike20200311.pdf (wbsj.org)
- 5) Stefan Heinänen, Ramūnas Žydelis, Birgit Kleinschmidt, Monika Dorsch, Claudia Burger, Julius Morkūnas, Petra Quillfeldt, Georg Nehls (2020) Satellite telemetry and digital aerial surveys show strong displacement of red-throated divers (*Gavia stellata*) from offshore wind farms, Marine Environmental Research, Volume 160, 104989, ISSN 0141-1136
- 6) Joris Everaert, Eric Stienen (2007) Impact of wind turbines on birds in Zeebrugge (Belgium) Significant effect on breeding tern colony due to collisions Biodiversity and Conservation 16(12):3345-3359
- 7) Centre for Environment Fisheries and Aquaculture Science (CEFAS) (2006) Scroby Sands Offshore Wind Farm - Coastal Processes Monitoring (Report No. AE0262).